
立ち上がる意思 ルーフェイア・シリーズ07

こっこ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

立ち上がる意思 ルーフェイア・シリーズ07

【Zコード】

Z6152E

【作者名】

ひつじ

【あらすじ】

穏やかな浜辺に写しだされる、過去、力、そして意思。心優しい美少女が繰り広げる、異色の学園バトルファンタジー シリーズの第7作です。少しだけ、全編通しての「謎」が出てきます 反王道、「無情」という名の条理がある」とまで言われた、ひたすらビターな世界をビュウ 携帯版は1行毎の改行〇〇空行です

Ruffer

「海だ〜」

ミルがやけに嬉しそうな声で、浜辺へと駆け出した。

別に今日じゃなくたって、海はなくなないこと思つけど。でも確かに、入れるという意味じゃ、特別かもしれない。あたしはよく知らなかつたけど、海つていうのはいつでも入れるものじゃないらしい。一年のうち期間を区切つて、その間だけ、泳いでいいって決まつてるんだそうだ。

ただなぜわざわざ、そんな面倒なことをするのかは、よく分からなかつた。

しかも面白ことに、その解禁日 つまり今日 は、シエラの生徒が全員で海へ入ることになつてゐる。

ちなみに理由をイマドに聞いてみたら、どうもケンティクの街側が「せつかくの解禁日なのに誰もいないのは寂しい」と言つて、以来こいつになつたらしい。

世間つて、けつこうヒマかも。

ともかくそんなわけで、学院の全生徒で浜辺はあふれてた。ただこの海岸はかなり広いから、それなりにゆつたりした感じだ。

「やつぱりいいよね〜」

「ほんと、夏が来たつて感じ」

ナティエスとミルが、おおはしゃぎだ。シーモアもけつこう、嬉しそうにしてゐる。三人ともわざわざ水着を新調してゐるんだから、よっぽど楽しみだつたんだろう。

「ほら、ルーフHもおいでよ？」

みんなに呼ばれて、あたしも浜辺に足跡を残した。
なんだか、足がさらわれそうだ。波が引いていく感触が、気持ち

悪い。

「どしたの？ なんで入らないの？」

「あたし……海は、あんまり……」

うまく答えられない。何より、言いたくない。

「どうして？」

よっぽど不思議らしくて、みんなが一緒にこっちを見る。
やつぱり言わないと困まりそうになくて、仕方なしに、あたしは
口を開いた。

「だつて、あたし……泳げない……」

「ええ～～つ……！」

みんなの驚きの声が、きれいに揃う。

「ホントなの？」

聞かれて、慌てて言いわけした。

「あ、えっと、ぜんぜん……泳げないとかじや、ないの。 でも、

あんまり……上手くない……」

言つてゐるうちに、だんだん自分が情けなくなつてくれる。

「信じられない。ルーフHってなんでも出来るから、泳ぎも得意だ

と思つてた」

「うんうん」

なんかあたしが泳げないの、いけないとみたいだ。

「でも、だから……泳ぎとか、習ひ物、なくして……」

「あー、そつかあ」

あたしの説明に、みんなが納得する。

「たしかに前線じゃ、悠長に泳いでるワケじゃ、いかないだろ？」
ねえ

「けどね、やつぱりルーフって、習わなくても泳げそんなんだけ
どな」

「言える～」

あたし別に、そんな何でも出来るわけじゃないのに……。
なんだか落ち込んであたし、ちょっとため息をついた。

I'm a d

「や～っともどりてきたか」

海からあがつた俺に、悪友たちが声をかけてきた。

「わ～い。久しぶりだから、ちと夢中になつてた」

「い～つてい～つて」

「い～つらもいい加減、夏の俺の行動パターンは飲み込んでるっぽい。

「ホントお前、泳ぎは上手いよな～」

「まあな」

つか俺、泳ぐのだけは自信ある。今年も一夏泳ぎ込んで、タイム上げるつもりだった。

よく晴れただけあって、日差しがキツい。突き刺さる感じだ。

でも去年はこの日、Hラク寒くてみんなでひびい田に遭つたから、それを思えばかなりマシだなつ。あの時俺は平氣だつたけど、クラスはほぼ全滅したし。

どっちにしても明日からは、思う存分泳げるつてやつだ。その意味じや今日は、俺が一年でいちばん楽しみにしてる日だつた。

ルーフェイアのヤツは、海開きの意味が分からなかつたらしくて、ひたすら怪訝そうな顔をしてたけど。

あいつに言わせると「やここあるの」と、元の自由に泳げないのか「つて」とりしこ。

「おーい、飲むか？ いっち来いよ」

「あ、いま行く」

あいつら、こいつの間にか日陰を陣取つてやがる。俺も連中の隣へ

行って、腰を下ろした。

「しつかしよかつたよなー、晴れて。去年はヒサンだつたじゃねえか」

「つていうか、あれで海に入れつて方がムチャだよ」

「お前ら見てねえだろけど、去年のムアカ先生、すげかつたぞ。怒りまくってたかんな」

「あー、なんかわかる」

ついてこの話になるのはしようがない。去年はともかくヒドかった。んでその分、今年はみんな、浮かれまくってる。

といえばこの話、ルーフェイアのヤツ知らねえな。あいつは今日ば、シーモアたちといっしょなはずだ。

「おーい、イマドー？」

「ん？」

アーマルに呼ばれて、はっとわれに返る。

「また、ぼーっとしてさ。ルーチャんのことだら」

「イマド、保護者だもんな」

「よく分かってんじやねえか

この一言で、2人が黙つた。

けつこうにじつら、わかりやすいよな。

まあどっちにしてもルーフェイアのヤツは、バトル以外は信じられないほど非常識で、あぶなつかしいことこの上なしだ。見てねえと何すつか分かんねえ雰囲気がある。

と、当のルーフェイアを見つけた。

なんかいつものメンバーに囲まれてつねび、どうこうわけか下向いて、なんかヤバげな雰囲気だ。

「わりい、なよっと行ってくるわ

「いや待て、ルーちゃんのことなら僕も行くか」「なんかなしう崩しに、こいつらもついてくる。

近づくとすぐ気配に気づいて、ルーフェイアのヤツが振り向いた。

「お前ら、なにやってんだ?」

「あー、イマド? それがさ、ルーフェったら海、ヤなんだって」

「え? なんでだ?」

けど、こいつの足元を見て気づく。まさかって思ひナビ……。

「それがさ、ルーフェイア、泳げないって」

「あー、やっぱそうか。いまコイツの足元見て思った」

ルーフェイアのヤツは、みんなに知られたくないんだ。バツの悪そうな、泣き出しそうな顔だ。

けどホントのこと言つと、俺も信じらんなかつた。バトルとなれば上級生顔負けのくせに、泳げねえつてのは意外すぎる。

「あたし……海軍じゃなかつたし……」

「いやそれカンケーねーだろ」

「いやあ、でもいいんじゃない? ルーちゃんに意外な弱点! いいなあ、うん」

ヴィオレイのヤツ、ぜんつぜんフォローになつてねえし。

「あのや、ルーフェよけい落ち込んでない?」

「わわ、ルーちゃんゴメン!」

突つ込まれて、ヴィオレイが慌てて謝る。

でもよく考えてみりや、あらうる話だつた。ルーフェイアのヤツ

は戦場育ちだ。のんびり泳ぎを嗜つ暇なんて、ありやしなかつたんだろう。

当人はみんなにいろいろ言われて、かなり落ちこぼれてるっぽい。このまま放つとくとたぶん、また泣くだろ。こいつの泣き虫は筋金入りだ。一回泣き出したら、しばらくは泣きやまねえし。

「おまえ、水には浮けんのか？」

「とりあえず助け舟、出してみる。

「そのくらいだつたら……」

どうにか間に合つたみたいでルーフェイアのヤツ、泣かねえうち

に顔を上げた。

「そしたら、俺が教えてやるよ。シーモア、俺ら置いてつていいいぜ？」

「わかった、すまないね」

「そしたらあとでね」

シーモア、ナティエス、ミルの3人が、きやあきやあ騒ぎながら海へ入つていった。

「なんか……ごめん」

「ルーチャン、気にしなくていいから！ 僕たちも教えてあげるよ」

行く気満々のヴィオレイの頭を、アーマルのヤツがぶん殴る。

「オマエさ、ちょっとは気利かせりよ。おれらお呼びじゃなにって
え？？ そんなわけないじゃないか！ ね、ルーチャン」

「あ、うん……」

断るつーこと知らねえルーフェイア、圧されてうなづいてるし。

「いいからオマエ、こつち来いつ！ イマドはビーでもいいけど、
ルーフェイアがカワイソウだろ」

アーマルのヤツが、ヴィオレイの首絞めながら引きずつて。
なんかビミョーに、腹立つ言い方しゃがつたけど。

ルーフェイアのヤツが、ほつとした表情になつた。やっぱ泳げね
えとこは、見られたくなつたらしい。

「一人に、謝らなきや……」

「気に入んない。あこつら、こつもあんなどかんな

「そう、なんだ」

「こいつといつしょに歩き出す。

「向こうで教えてやるよ。あつちなら人も少ねえし。ただ、ちつと
歩くかんな

「うん」

この海岸は、ケンティクきつてのリゾート地で有名だ。延々とキ
ロ単位で砂浜が続いて、ホテルもかなりの数が建つてゐる。だから
浜辺もかなり整備されてて、ところどころに桟橋なんかもあつた。

その一つへ向かう。割と浜辺の端のまつこつて、この向こう側
はほとんど人は行かねえ場所だ。

ルーフェイアも、とことこついてきた。

「少しほは、泳げるの。でも……頗るたこと、なにし……」「わかつてゐるつて」

よつぽんど氣にしてんだろ? 一 生懸命言い訳するあたりが、けつじつ可愛い。ナティエスかミルが選んだりしこ、田のワンピースの水着がよく似合つてた。

これでもう少し体型が……。

「なに? あたしなにか……変?」

「いや、おまえってマジで、幼児体型だよな」

「!-!-」

ヤバいと思つたときこちや、すでに鳩尾に蹴りを食らつたあとだつた。

すつづー強烈。

胸(腹?)をおせえたまま、立てなくなる。これで恐りへ手加減してんだから、むちゅくちゅつてしか言こよつがない。
けどこの手の話だと、なんでかルーフェイアは、口ほどには傷つかなかつた。ケリが出るのがいい証拠だ。もし本当に傷つけば、蹴るよつ先にこいつは泣き出す。

「先に、行く!」

けつこいつ怒つてゐるからして、ルーフェイアのヤツは俺置いて、さつと歩き出した。

Ruffer

結局泳げないあたし、シーモアたちと別行動することになった。

ほんとはいつしょに、行ってみたかったけど。

でもみんな泳ぎが上手みたいだから、あたしが一緒に楽しめないだろう。

ただ、イマドが教えてくれると言つてくれた。さすがに一人じゃ寂しいかな、と思つてたから、ちょっと嬉しい。

「少しさ、泳げるの。でも、習つたこと、ないし……」

なんとなく自分が泳げないのがいけないような気がして、いろいろ言い訳してみる。

でもいつものようにイマド、あたしを責めたりしなかつた。

「わかつてゐるつて

ほつと心が軽くなる。

少し歩調を上げて、イマドの隣に並んだ。彼とは頭ひとつ違うから、急ぎ足にならないと並んで歩けない。

けどこの水着、いまいち馴染まないな。

水着なんて着たことないし、これ自体も新しいおろしたてだから、どこか着心地がよくない。戦闘服のほうがよっぽどましだ。

と、イマドがあたしを見ているのに気づく。

「なに？ あたしなにか……変？」

こんな格好したの初めてだから、すこく気になる。でも、イマドの答えはぜんぜん違うものだった。

「いや、おまえってマジで、幼児体型だよな

「……」

思わず体が動いて、鳩尾に蹴りを叩きこむ。イマドがその場にしゃがみこんで動けなくなつたけど、無視した。どうせ手加減しておいたから、そのうち回復するはずだ。

「先に、行く！」

さすがに腹が立つたから、イマドを置いて歩き出す。気にしてるのに！

どうもあたし、昔から小柄だ。それになかなか身長も伸びない。もちろん戦闘なんかじやすごく不利で、スピードと従属精霊とで、それをようやく補つてゐる。

力に至つては、底上げしてもかなり厳しい。体质のおかげで精霊との相性が良くなかったら、とつて昔に戦場で死んでるだろ。

まあ最近は、そういう心配もないけど……。

そして、背筋が寒くなつた。人間は、こんなに簡単に慣れてしまうのかと。

今まで生きてきた殆どをすこしたばずの戦場が、とても遠いところに思える。

夢は叶つた。

友達も出来た。

けど、これでいいんだろうか……。

あたしが手にかけてきた人たちを、裏切つてゐる気がする。そのあたりへ腰をおろして、ふと、足もとの貝殻を拾つた。

綺麗だけれど、命のないただの抜け殻。

あたしの知ってる人もこうして抜け殻になって、一度と帰つてこなかつた。

会いたい。

優しかつたあの人たちに……。

「お久しぶりですね
「たつ、タシュア先輩！」

振り向くと真後ろに、先輩が立っていた。

銀髪と紅い瞳。金髪に碧い瞳のあたしとは、不思議なくらいに正反対の容姿だ。

上着を羽織つてゐるけど、その下はちゃんと水着だ。でも、眼鏡はかけたままだつた。

この先輩を見ながら思つ。やっぱり勝てないと。

なにしろこの先輩が片手で軽々と扱うあの両手剣 ラスニール
というんだそう は、あたしじゃ両手で持ち上げるのがやつとだ。
何よりあたし、先輩の胸あたりまでしか身長がない。体重なんか
は倍くらい違うだろ？

羨ましかつた。

たとえ大人になつても、女のあたしはきっと勝てないに違ひない。
でもあたしは、この先輩が好きだつた。細かくは知らないけれど、
同じように戦場で育つたということに親近感を覚える。

それに、この先輩は強い。

こんな風に生きられたらしいだろ？な、そつ思つて先輩の方を見
る。

「何か、聞いてほしいことでもあるのですか？」

たぶんあたしの視線を違う意味に取つたみたいで、静かな声で先
輩がそう言つた。こういうことを言う人じやないと思つてたから、

ちょっと意外だ。

もしかすると、今日は授業がないから、機嫌がいいのかもしねない。

「なんでも……ないんです。ただ、平和慣れが……情けなくて」
なんとなくため息がでる。

そして、ふと思いついた。前からひとつだけ、知りたいことがある。

「あの……先輩、えっと、あの……」

「はつきつ言つたらどうです。それでは何が言いたいのか、まつた
く分かりませんよ」

「あ、すみません……」

やつぱり怒られる。

でも今日はどうこうわけか、それだけだった。だからいつもと勇
氣付けられて、続けてみる。

「えつと、だから、訊きたいことが……」

どうにかそれだけ言えた。

「なにを聞きたいのかは知りませんが　面白い話はできませんよ」

「あ、ええと、そういう話じゃなくて……」

今度は怒られずに済んだけど、上手く説明ができなくなってしま
う。

でも今日は先輩、いつもより機嫌がいいみたいだった。

「まあ、答えられる範囲でなら、いいでしょ？」

それでもなんだか言い出せなくて、しばらくためらつてからやつ
と、あたしは聞きたかったことを口にする。

「先輩のいたヴァサーナって、どんなところなんですか？」

この間送りられてきた手紙に、そう先輩の出身地が書いてあつたのだ。

ヴァーサーナは東の大陸にある国で、ここから側の世界とはあまり付き合いがない。魔獣や海竜の棲む大洋が、行き来を阻んでるからだ。ただシユマー家経由で入ってくる情報だと、独自の文化と、高い科学力を持つてるらしい。

だから昔から、とても興味があった。

けどこの質問で、なんとなく先輩の表情が変わった気がした。聞いたやいけないことを、聞いてしまったのかもしれない。

「あの、すみません。えっと、いいです……」

慌ててそう言ひ。

でもタシユア先輩の答えは、ちょっと思つてたのとは違つた。

「構いませんよ。聞いていいといったのは、こちらですかね。ヴァーサーナですか。荒野に無理矢理人間の居場所を造つた、居心地の悪いところです」

「そう、なんですか……？」

ぜんぜん想像していなかつた答えに驚く。もつと素敵などいろだと、想像してたのに。

「もつとも私も、すべてを知つてゐるわけではありませんがね。ずっと研究所について、あとはそのまま戦場行きましたから」

「じゃあ、やつぱりその傷痕……？」

さつきからずっと気になつてた。

上着を羽織つてはいるけれど、時々その陰から見え隠れしている。それもひとつふたつじゃない。中には死にかけたに違いないもの胸の傷は間違いなくそうだ。まで、信じたくない数だった。

「そういうことです

「そんな、ヒドイ……」

涙がこぼれそうになる。

あたしも何度か大怪我をしてるから分かる。これだけの傷を負いながら生き延びることが、どれだけ難しいかが。

しかもずっと研究所に押し込められていて、そのあとはこんなひどい怪我をする場所に放り出されたなんて。

胸の傷が疼いた。

あたしにとつてはいちばん大きかった怪我だ。

もつとも見た目には、何もない。あたしの場合、小さなものまで含めて傷痕はすべて、シユマーの医療技術を結集して消されてる。それでも痛かった。

どうしてあたしたち、こんな田に遭つてるんだろう?

涙があふれて、止まらなくなる。

そんなあたしを見て、タシュア先輩が冷ややかに言つた。

「同情ですか？ そんなものは欲しくありませんね
「ちがいます！」

自分でもびっくりするくらい、強い口調だった。

「そんな、同情なんて……。やうじやなくて……あたしたち、どうして……」

言葉が続かない。

ただただ、悲しかった。

どうしてあたしたち、普通に育つちゃいけなかつたんだらう? それを望むのつて、そんなにいけないんだろうか?

でも先輩は、静かな声のまま言つた。

「昔のことです。忘れるとは言いませんが、氣にしそぎると前に進めませんよ」

「あ、はい」

急いで涙をふぐ。

そうだ。泣いてたつてどうにもならない。

「おや、迎えが来たようですね」

「え?」

言われて先輩の視線をたどると、やつきの蹴りからやつと回復したみたいで、イマドがこつちへ歩いてくるところだった。

そつと手を振つてみると、すぐ氣が付いてこつちへ走り出す。それを見て思つた。イマドってやつぱり、「真つ直ぐ」な感じがする。

「つたぐ、もうちつと手加減しろよな。

つて、また泣かされたのか?」

先輩が間髪入れずに言い返す。

「人聞きの悪いことを言わないで下さい。私は何もしていませんよ

イマドが「ホントか?」つて顔で、あたしを見た。

彼の視線にうなずいて返す。

「あたしが、勝手に……泣いたの」

「お前がそう言つなら、そうなんだろな」

あつさりイマドはあたしの言つことを信じる。そして先輩の方に向き直つた。

「すみません先輩、」こいつが迷惑かけたみたいで

「なんだかいきなり、ヒビいことを言われる。

「おやおや、まるで保護者ですね。」

「あー、それ、」こいつのお袋に頼まれてんで

まだ。

誰がどう見ても変わつてゐるこしか言つがない母さん、その割にかなり世話焼きで過保護だ。あたしの知らないところでさつさと話が通されてたりと、根回しがれてることはじょっちゅうだった。恥ずかしいからやめてつて言つてゐるのに、気にもしてくれないし。

「つか、こいつ野放しとか、けつこいつ怖いですよ?」

「それは否定できませんね。」

まあ不要な傷を作らないように、彼女の背中を守つてあげるのですね

先輩まで……。

みんなから思つて、好き勝手言われてる気がする。

でもこいつのつて、あつたかいかも。

また、涙がこぼれた。

I'm ad

ルーフェイアのめちゃめちゃ強烈な膝蹴りから回復するのに、けっここりかかった。

なんせ手加減してるとても、さっさと急所に決められちゃ、キツいなんてもんじやない。

まあこれに関しちゃ、口滑らせた俺が悪いいんだけビ……でも、あいつ、体型ガキなのは事実なわけで。

とりあえずどこへ行つたかと思つて、歩きながらあたりを見まわしてみる。

あ、いた。

向こうも気が付いて、少し手を振る。

それにしたつてなにがどうしたんだか、「あの」タシュア先輩といつしょだ。

俺にとっしゃ信じらんねえ話だけど、海に落ちた一件以来ルーフェイアは、あの先輩になつてゐる。タシュア先輩をつかまえて「いい人」って言うのは、おそらくあいつだけだろう。

しかもよく毒舌食らつて泣かされてるつてのに、性慾りもなくついてくんだからたいしたもんだ。

なんでそうなつたのかこないだ聞いてみたら、診療所で寝てた時に、「お見舞いに来てくれた」つてことらしい。

話の内容総合すつとシルファ先輩のほうはともかく、タシュア先輩はお見舞いつてのにはなんか程遠い気はすつけど、当人はともかくそういう判断だ。

で、ともかくルーフェイアはことを甘いやつだから、それであ

つさり「いい人」に評価変えたらしい。

バトルとなつたら容赦がないけど、それ以外はあいつ、あきれる
くらいくに優しいつづーかお人好しだ。

ま、それがいいとこなんだけど。

それにバトル 자체もぜんぜん好きじやなくて、否応なしに身体が
動くだけって、本人は言つてるわけで。
もしシユマーなんてワケわからんない家に生まれなかつたら、普通
にガツコ行つてダチと仲良くして、それで終わりだつたろう。

でも今はとりあえず、先輩に泣かされないうちに引き取るのが先
だろう。

「つたぐ、もうちつと手加減しろよな。

つて、また泣かされたのか？」

近づいてみたら、また涙のあとがついてやがる。

「人聞きの悪いことを言わないで下さー。私が泣かしたわけではあ
りませんよ」

どうにもこの先輩の言つこのセリフは信用ねーから、ルーフェイ
アのほうを見ると、じつもこつくじうなずいた。

「あたしが、勝手に……泣いたの」

「お前がそう言つなら、そななんだうつな」

俺も甘いな、と思つ。毎度こいつの言つひと、鵜呑みにしてんだ
から。

そんなこと思いながら、とりあえず先輩の方に向き直つた。

「すみません先輩、こいつが迷惑かけたみたいで」

「おやおや、まるで保護者ですね」

「あー、それ、こいつのお袋に頼まれてんで」

ルーフェイアのお袋さん、実はかなり過保護だ。最初のときはもちろん、ルーフェイアのヤツが学院来てからも、俺のほうになんやかや話回してくる。他にも、学院長辺りにもいろいろ言つてるらしい。

ただ当のルーフェイアには分かんねえようにあるのが、ちょっと面白いところだつた。

それに俺からしても、常識がいろいろヤバいルーフェイアは、かなり見てて危なっかしい。

「つか、こいつ野放しとか、けつこいつ怖いですよ？」

「それは否定できませんね。

まあ不要な傷を作らないように、彼女の背中を守つてあげるのですね」

先輩はさう言つたが、こいつの背中取れるヤツって、言つてる当人だけじゃねえのかな、と思つ。たしか傭兵やってる親もとれないとかなんとか、俺、聞いた気がするし。

つて、ルーフェイアのやつが泣いてるし。

「こんどは何だ？」

「あ、こめん……。平氣、もう、泣かない……」

「ムリすんな。しばらく泣いてろ」

なんかよく分かんねえけど、何かに感動して泣いてるっぽいから、そのままにする。

と、今度はいきなり、嬌声ともいえる声が響いた。

「あー、ルーフェイアいたいた！」

シーモアたちだ。

「やつぱつ、いつしょに泳ぐつと思つてや」

「やつあは！」めんね？ つて、泣いたりして、どうしたの？」

「あ、タシコア先輩こんにけは～」

「こんにけは、ミルドレッズ=セルシユ=マクファーディ」

「タシコア先輩に泣かされたのかい？」

「うそお……よく、ミルのフルネーム……」

「や～、先輩つてす～」

一気に周囲が騒々しくなる。

「さつあは悪かつたよ、置いてつたりしてや。や、もう泣くのは止めなよ」

「あ、ちがうの。そうじやなくて……」

「ルーフェイア、泣いてもカワイイ」

「みんなでお昼食べて、いつしょに泳ぐつ？」

それにも女子つてのは、よく喋るな……。

「では迎えも来たようですし、私はこれで失礼します」

「え～、こつちやうんですかあ？ いつしょにお昼食べましょつよ

」

「おこ、ミル……。普通この状況で、タシコア先輩誘つか？」

「遠慮しておきます。

あまりうかれますと、砂魚に思わぬ怪我を負わされますよ」

「あ、は～い 先輩今度、みんなでどつか行きましょ～ね～

「もお、ミルつてばやめなよ……」

もともとなんの話だったのか、わかんなくなってきた。
先輩も呆れ顔で、でも上手く逃げてつてるし。

ともかくまだやいのやこの驟<じゆ>にでる女子連中に、声をかける。

「お、こいつ引き渡していいのか?」

「引き渡すつて、ひどい……」

「ああ、かまわないよ。とりあえずお腹<はら>にこもつと黙<だま>つておけ」

「そう言<ことば>はずむう、そんな時間かと呟<のんびり>つ。

「あ、そーだー。ここと思<おも>ついたーー。」

「この一言に、自分でも血の気が引くのが分かつた。ミルの「いいこと」つてのは、マジでロクなことがない。

「お・ひ・る・ひめーだい イマドリツキ、なんか作<つくり>てきたんでしょ」

「冗談じやねえ! お前の分なんか作<つくり>てねえつてのーー。」

「けど思<おも>えばこれが、最大の墓穴<もくあな>だった。

「イマドリ……料理するんだ?」

「こつもみてえに少し首をかしげて、ルーフェイアが誰<だれ>にともなく言<ことば>つ。

「あれ、ルーフェイアつてば知<し>らなかつたの?」

「ナティエス、言<ことば>ふんじゃねえ」

思いつきり嬉しそうなナティエスのヤツ、止めたけど聞<き>きやしなかつた。

「いいじゃない、教えてあげるくら<こ>。」

ルーフェあのね、イマドリ<ことば>、料理けつこう上手<じょうしゆ>なの

答えを聞いたルーフェイアが、目を丸くする。

「ほんとに……?」

「うん。てか、ウソついたってしょうがないもの」

なんとなく、次のセリフは予想がついた。

「あたしも、食べたい、かな」

「はい、決まり」

あんな調子だけど、ミルのヤツは意外に鋭い。俺が断れないのを読んで、勝鬨の声を上げる。

なんでこうなるんだよ。

ルーフェイアだけならまだともかく、こいつら女子ときたらウルサイわよく食うわ、たまつたもんじゃねえってのに。ナビこいつら、食う気満々だ。

そんな俺の肩を、シーモアが叩いた。

「イマジ、あたしもナティと作ってきたからさ」

「……すまねえ」

まだ毎も過ぎぎないつてのに、思いつきり疲れながら、俺は諦め半分で礼を言った。

Ruffer

イマドが料理するなんて、知らなかつた。
ちよつと尊敬。

あたしつてそういうのは、ぜんぜん駄目だ。
ちなみになにがどうなつたのか、お昼はあたしたちとイマドの友達と、なんか七人の大所帯になつてゐる。
しかもなんと言つか、生存競争が激しい。

「お前ら、ちつと遠慮しろつての！ おいルーフェイア、しつかり確保しねえと、食つもんなくなるぞ！」

「あ、うん」
でも毎日の昼休みの食堂での騒ぎといい、この今の凄さといいシコラつてなんか違うとこで、バトル厳しいような？

「ほら、これおいしいよ」

まるで自分が作ったみたいな調子で、ミルがあたしに勧めた。
イマドの作ったサンドイッチつて、凝つてる。

「これ……なにがはさんであるの？」

お肉と野菜 だとは思つんだけど。

「なつて、葉菜とメナナとロースト肉、でしょ？」

「ロースト？」

でもナティエス、このお肉……ローストつて言つてたのに、中が生みたいだし……」

戦場あたりじゃ生は食べないのは、鉄則と言つてもいい。

「ほんとに食べても、大丈夫？」

あれ？

「言つたとたん、なんかみんなが石化した。」

「ねえ……みんな、どうしたの？」

「どうしたもううしたも、お前普段、なに食つてるんだよ……」「なんかイマドも、すげえショック受けてるみたいだ。」

「なにつて、食べられるものなら、なんでも……。好き嫌い、ないし」

「意味が違う！」

「こんどはミルが叫んだ。

あたし、そんなに変なこと言つたんだらうか？」

「ど、ともかくも、残りをひと食べて、泳ぎに行かないかい？」
シーモアもすいぶん焦つているみたいだし、他のみんなも同意して、慌てて昼食の残りを片付け始める。

けどそんなに慌てたら、消化に悪いんじゃないだろうか？
ともかくおかげで、あつさりぜんぶなくなつた。

「あたしが後片付けしとくよ。みんな先に行つてな」
面倒見のいいシーモアがそう言つてくれたから、みんなで甘えることにする。

あいかわらず波打ち際は、寄せては返す波が洗つていた。
透き通つた波に足が洗われると、踏みしめたはずの砂が流されていく。

それがやっぱり嫌で、なるべく波の来ないとこひを歩いた。

「あ、船」

「ほんとだ～」

ミルとナティエスが、歓声を上げた。

つられて沖を見る。

突き刺さる陽射しの下、あたし改めて海を見た。
瞳に飛びこんでくる體。

広い。

それに海って、こんなに綺麗だつただろうつか？

遙かな碧さ。

煌く光。

遠い彼方で空と混じつて、そこで青が変わる。

立ち昇つた雲が、目に痛いほど白い。

そうだ、あたしずつと憧れてた。

海の色はあたしの瞳と同じだと、ずっと聞かされていたけど。
ほんとうだったんだ。

思い切つて、一歩海の中へ入つてみる。

冷たい感覚。

波が流れしていく。

無限の回数続く、潮騒の音。

きつとあたしが産まれる前……ううん、シユマードという家が生まれるずっと以前から、同じ音だったんだわ。

「」の碧い海に訊いたらきっと、人が忘れてしまった昔も分かる

のかな。

その時、ふわりとあたしの視界を、影がよぎつた。

驚いてその影を追いかける。

視線が行きついた先には、投げられたタオルを鮮やかに受け取つた、女子の先輩がいた。

まとめあげた艶やかな長い黒髪、紫水晶を思わせる瞳――の間お世話になった、シルファ先輩だ。

背が高い上にスタイルがいいから、黒のシンプルな水着がよく似合つてゐる。

シルファ先輩、タオルを羽織るようにしながら海から上がつてきて、向こうへと歩いていく。そして投げた人　もちろんタシュア先輩　と、話し始めた。

「なに見てるの？」

不思議に思つたらしくて、ナティエスが訊いてくる。

「うん、ほら」

「あ、シルファ先輩じやない。やつぱり素敵だなあ……」

「あの先輩さあ、いつ見てもカッコいいよね」　スタイルもすつ

「いいいし」

ミルも隣へ来てはしゃぎ始めた。

「しかもさ、いつも美男美女で並んでるんだもん。もぉサイコー！」

「いつも？」

仲が良さそなのは知つてたけど、そんなにだとは思わなかつた。

「あれルーフェ知らないの？　シルファ先輩、タシュア先輩のカノジョだよ」

「有名だよね、その話」

一人が言つところを見ると、学院内じやよく知られてゐみたいだ。

「ケーキ、だけじゃないんだ」

「ケーキ？」

ナティエスがなんのことか分からぬ、といつ顔をした。

そういう例の話、イマドとロア先輩しか知らないんだつけ。ナティエスたちには、なんだかタイミングを逃して、けつきよく言つてなかつたはずだ。

「えつとね、その……前に診療所で寝てたとき、あの先輩がケーキ

……持つてきてくれて」

「うそあ、いいなあ！」

「それ、羨ましすぎかも」

一人が声を上げる。よく分からぬけど「シルファ先輩のケーキ」は、特別なものみたいだつた。

でも確かに、なにが入つていたのかはいまだに分からぬけれど、とてもおいしかつたのは事実だ。

「あたし……ちょっと、行つてくる」

「なになに、ルーフェイアつたらシルファ先輩のとこ行くの？ ん
じゃあたしも」

「あ、抜け駆けとかずるい。あたしも行く」

結局3人で行くハメになつた。

あ。

少し近づいてみたらタシュア先輩、感じがいつもどぜんぜん違つ。なんと言つたらいいんだろう……そう、すぐ穩やかな感じ。

シルファ先輩がタシュア先輩にとつてどういう人か、やつと分か

つてなぜか嬉しくなつて、もつとそばまで行く。

「まだ何か？」

あたしたちが行くと、タシュア先輩が少し呆れたよつた声をだした。

「えっとお、ルーフェイアが用なんですか？」

第一声を発したのはミル。あたしが何か言つ間もなかつた。

それにしてもミルの神経、極太のザイルででもできるんだらうか？ この先輩相手に平氣な顔だ。

そして彼女、今度はシルファ先輩に向き直つて一言。

「 89、59、88？」

聞いた先輩たちが、怪訝な表情をする。

「ねえ、ミル。その数字……なに？」

あたしは意味がわからなくて、ミルに訊いてみた。

「あれ、ルーフェ知らないの？ エットねえ、だから上からなの「上から？」

「もおルーフェイアつてば！ だからムネがあ……ふみゅつ？！」

そこまでミルが言いかけたところで、ナティエスが強引に彼女の口をふさぐ。

「ミル！ いくら先輩がスタイルいいからつて、いきなり何言つてるのよ！」

ルーフェイアも訊くんじやないの！」

「え？ そうなの？」

結局なんのことかは、分からずじまいだ。

あとで、イマドにでも訊いてみよう。

タシュア先輩があたしたちに、冷ややかな視線を向ける。
「そんなくだらない」と、わざわざ言いに来たのですか?」
「すみません……」

謝るあたしに、シルファ先輩が声をかけてくれた。

「もう、いいのか?」

「あ、はい」

言葉はそうでもないけど、優しい声だ。

「そうか。心配してたんだが……元気そうで、良かつた」
「はー!」

先輩にそう言われて、なんだか嬉しくなる。

「えっと、あの、ケーキ……おしかった、です」

あたしがそう言つと、シルファ先輩の顔が少しほころんだ。

「ねえ、どんなケーキだったの?」

ナティエスがそつと訊いてくる。

「えっと……?」

あの時は食べただけで名前は聞かなかつたし、そもそも何が入つているのか、いまいち分からない。

「もう。ルーフェイアつてばホントそういうの、覚えてないんだから」

「「「めん……」」

やり取りがおかしかつたみたいで、シルファ先輩が笑いながら、助け舟を出してくれた。

「オレンジのケーキだ。間に、ムースも挟んだ」

「わ、いいなあー！ シルファ先輩、これどあたしにもください
～！」

ミルが騒ぐ。

「ミ、ミル、ちょっと……」

「なんでルーフェ、止めるの？」

ねえ先輩、ミルは先輩の手作りケーキ、食べたいですう～～～！
あたじじやミルの勢いは、止めようがなかつた。

「わかつた」

「やつた～」

困惑しながらも承諾したシルファ先輩の答えが、ミルはよほど嬉
しかつたらしい。手を叩きながらそこら辺を飛び跳ねている。

「シルファ先輩、あの、すみません。すぐ彼女……連れていきます
から」

「あ、ルーフェイヤつてばヒドおい！ 泳ぎ教えてあげないから～～～！」

あ、やだ！

この毒舌の先輩に泳げないなんて知れたら、また何か言われるに
決まつてゐる。

でもタシュア先輩が口を開くより早く、シルファ先輩が考えるよ
うにしながら言つた。

「泳げないのか？ なんなら、教えてもいいが……」
びっくりして先輩を見ると、優しい笑顔だった。

「あの、ほんと……ここんですか？」
シルファ先輩に教えてもらひるなう、聞ひにとなんてない。だい
いぢりじや恐ろしそぎる。

「まあ……私もそれほど、上手こわけじやないんだが
「いえ、そんなこと！ あの、ようじくお願ひします
けどあたし、まだ甘かった。

「あ、いいなあ！ ルーフェイアッヒば、ひとりでするう、あた
しも～！」

ミルの嬌声が響く。

「ちよつとミル、そんなこと言つたら迷惑だよ……」
とつそにナティエスがなだめに入つてくれたけど、その程度でミ
ルが止めるわけがない。

「あ、ええと……それならみんな、来るといい
「やつたあ！」

結局、押しの強いミルの勝ちになつた。

「……先輩、ほんとこすみません……」

ひたすら謝る。

「いや……気にするな

「すみません……」

「ほんとうに、気にしなくていいから……」
「いけない。このままだら、回りやつつの堂々巡りだ。

「えつと、あの、そしたら……よひく、お願ひします」

「ああ、わかった」

「どうにか無限ループを抜け出して、海のまづくとみんなで歩き始めた。

タシュア先輩はシルファ先輩にひょとうなずいて見せただけで、ひつちへはこなかつた。やつぱりミルと一緒に嫌なんだつ。

「じゃあ、ちよつといつてくる」

「いつてらつしゃこ」

シルファ先輩に、そう返しただけだ。

それにしても、意外だった。

何も言わないなんて。

なんだかかえつて怖い気がして、シルファ先輩に尋ねてみる。

「先輩、タシュア先輩、何も……言わなかつたんですけど……」

「うん？ ああ、泳ぎのことか。ルーフェイアがきちんと、泳ぎを習おうとしているからだろ？」

「え？」

なんかタシュア先輩つて、なにをやつても毒舌で締めくくつてしまふのかと思っていたけれど、どうも違つみたいだ。

「上手く言えないが……出来ない」とそのものには、あまり、タシ

ュアは言わないな

「もう、なんですか」

ようするにきちんと努力しようとすれば、それなりに評価するつてことらしい。

なんだかそれをすぐ不思議に思いながら、シルファ先輩に連れられて海へ入つた。

Tasha side

「じゃあ、ちょっとといつてくる」

「いつてらつしゃい」

シルファが歩いていく。下級生を連れて歩く様子は、幼稚園の先生のようだった。

タシュアからしてみれば、「甘い」としか言いようがない。なにしうあのミルドレッドがいるのだ。こうなるのは目に見えている。だがシルファのこういう優しさは、嫌いではなかつた。何よりあやつて慕つてくれる後輩が居るのは、他人が苦手なシルファにとっては、いいことだわ。

(ミルドレッドに関しては、疑問が残りますがね)

あれを「慕つている」とは、ふつう言わないだろ。どうも目に見ても、単純に騒いでるだけにしか見えない。

周りもよく、あの子のああいう行動を、許しておくれものだと思つ。もっともああいう性格では、言つだけ無駄なのかもしれない。

もうひとつ意外だったのは、ルーフェイアだ。まさか泳げないとは思わなかつた。

ただよく考えてみれば、先日海へ落ちた際にも、泳げりとはしなかつた。かなり危険な精神状態だったとは言え、普通なら何かするだろう。

だが泳げないのなら、あの行動も納得がいく。

(もしまだ海にでも落ちたら、どうするつもりだったのやら)

前回は運良く人目のあるところだったが、次はどうなるか分から

ない。

泳げないからと、素直に教えてもらおうとする姿勢は評価出来るのだが……やはつこわらも、甘ことしか言こよづがない。

(ルーフェイア、それは「浮いてる」というんです)

後輩の泳ぐ様子を見て、つい突っ込む。だいいちあんな浅いところで、どうやつたら上達するというのか。

だが教えているシリルファは、ずいぶん楽しそうだ。教えることに関して、適正があるのかもしれない。

その様子を横目に、タシュアは荷物へ手を伸ばした。この調子ではしばらくかかるだらうから、持ってきておいた読みかけの本の続きを読みでも、と思ったのだ。

日陰に腰を下ろし、読み始める。

そうやって、どのくらい経つだらう? 何かを感じた気がして顔を上げると、一行の頭数が減っていた。

何となく視線をめぐらせて探してみると、向こうの岩場へと向かう、ナティエスとミルダレッドの姿があった。ルーフェイアの相手に飽きて、遊びに行くことにしたらしい。

それにしても、ミルドレッドの浮かれぶりは常識はずれだ。あれで岩場へ行こうものなら、足を滑らすのは間違いない。さう思つてこる矢先、後輩が足を滑らせて尻餅をついた。

(……なんと言いますか)

「ここまで予想通りでなくともいいだらう、やつこわらくなる。よくこれでAクラスにいられるものだ。」

ただ、これといって怪我はしなかつたようだ。すぐに立ち上がりて、沖へと伸びる岩場を、ナティエスとじやれ合ひながら歩いていく。

(?)

それを見ていたタシュアの表情が、僅かに変わる。何か影を見た気がしたのだ。

ほんの一瞬のことで、気のせいだとも思える。だが、なぜかやけに引っかかった。

(武器だけでも、用意しておきますか)

こつものように音も気配もせず、タシュアは立ち上がった。

Ruffer

ざつと水面を割つて、あたし頭を出した。

「 だいぶ、上手くなつたな」

「 いいえ、先輩のおかげです」

シルファ先輩、教えかたがとても上手だ。
おかげで最初はやつと進む程度だつたのに、この短時間でびりつ
て、途中で息を継げるようになつてゐる。

「 わたしは……アドバイスしただけだ」

「 でも、先輩に、教えてもらつたから……」

「 ……そつか」

先輩つて、すゞく物静かで、ミルとは対照的だ。
それにとっても優しい。

「 早く先輩なんかといつしょに、泳げるようになるといいんですね
ど」

「 あまり、ムリはしないほうがいい」

「 はい」

ロア先輩も頼り甲斐があるけど、シルファ先輩はまた別の意味で、
いつしょにいると落ちつく。

「 そういえば……ナティエスとミル……？」

「 ああ、あの2人なら、岩場の方へ泳ぎに行つた

「 あ、そなんですか」

確かにあの2人、意外にも泳ぎが上手だ。きっとあたしとじゅう
まらなくなつて、向こうへ行つてしまつたんだね。

「こつたん上がるか？」

「はい」

先輩があたしの体調を心配して、そう言つてくれたのが分かる。

お姉さんって、こんな感じなのかな？

あたしは一人っ子 ラヴェル兄さんは実際には従兄弟 だから、そういうのはよく知らない。けど多分、間違つてないだろう。

「……あれ？」

2人で海からあがつてみると、タシュア先輩の姿がなかつた。

「手荷物はこゝだし……武器でも、見に行つたか？ ちょっと見てくる

「あ、はい」

なんとなくそのまま、浜辺へ座りこんだ。

碧玉よりも濃い、海の碧。

そして真つ直ぐな、空の青。

そこへあいかわらず、銀に見えるほど白い雲がわきあがつていた。

まぶしい。

圧倒されるほどに眩しかつた。

あたしがここの間までいた世界とは、あまりにも正反対だ。あの頃はこんな世界があるなんて、思つてもみなかつた。

同時に、とても不思議な気分になる。

このあたしが、こんなところにいるなんて。

もし一年前のあの日、あの町でイマドと出会わなかつたら……。出会わなかつたら、今『いのむつ、死んでいたのかもしれない。

あまり使いたくない言葉だけど、あれが運命の交差点だつたんだらうか？あの時を境に、あたしの時間の行き先が変わつたような

気がする。

きっとマリだと思っていた、夢の方向へ……。

そんなことをぼんやりと考えながら待っていたけど、先輩はなかなか戻つてこなかつた。気になつて、立ちあがつてあたりを見回してみる。

あ。

ちょっと遠いけど、学院がまとめていろいろ預かつてゐる辺りに、先輩たちの姿を見つける。

けど。

先輩たちが手にしているの……武器。

瞬間、あたしの身体にも独特の感覚がが走る。この感覚。戦場でいつも感じていたヤツだ。

でも、どこから?

気配を探つて、すぐに分かつた。岩場のほうだ。

そして思い出す。あそこには確か、ナティエスとミルが……。とにかくあたし、走り出した。

Sylopha

「！」にいたのか

「わざわざ探しに来たのですか？」

言葉だけ聞くと「何をしに来た」と言わんばかりだが、その声音はけして冷たくはなかった。

ルーフェイアあたりが聞いたら、驚くかもしれない。

「姿が見えなかつたから……それに、ルーフェイアも心配していた……」

「まったく。ルーフェイアでは自分の心配が先でしょ」「……」
いつものことだが、タシュアの毒舌は途切れることがない。

そして私は気づいた。

「タシュア……なにがあつたのか？」

タシュアが自分の大剣だけでなく、私の武器 サイズと呼ばれる大鎌で、これは背の部分にも刃がついている まで手にしている。

「何もありませんよ。今は、まだ」

「まだ？」

気になる言いかたに、自分の声が緊張を帯びるのが分かつた。

「先ほど、岩場の方向で影を見た気がしまして。

まあ一瞬でしたし、何事もないとは思うのですが、それでも気になりましたからね。念のためです」

「……そうか」

それ以上は、私は聞かなかつた。問いただす代わりにサンダルを

履き、足首のストラップをとめる。

タシュアの「気になる」は、何があると考へて間違いない。
そして武器を受け取った。

「ルーフェイアにも、言つておかない」と

「その必要はなさそうですよ。気づいたようですから」

「本当か？」

言葉につられて、向こうの波うちぎわへ視線をやると、確かにルーフェイアが緊張している様子だった。
なにかを探るようにして、辺りへ気を配つてゐる。
と、突然岩場の方へ駆け出した。

「おや、さすがシユマーのグレイス。気配だけで、相手がどこだか分かつたようですね」

「向こうのなか？」

確かあちらの岩場には、ルーフェイアの友だち ナティエスと

ミル がいたはずだ。

「ええ、確かに向こうですよ おや」

「……なんだ、あれは？」

この時になつてようやく、海面を割つて“それ”が海中から姿を現した。

まるで小山のような胴体に鰐状の手足。そして長い首と尾。

海竜？

その私の推測を、タシュアが肯定した。

「どうやら海竜の一種ですね。外洋では時々見かけるのですが、この辺には殆どいなはづです。

と言つても、現にいますがね

「つものように冷静に、彼は指摘する。

それにしても大きい。頭の先から尾の先まで、小さな飛竜くらいはあるだろう。

肉食らしく、開いた顎には鋭い歯が並んでいる。あんなのに噛まれたら、怪我どころか身体が真つ一つだ。

「あんなのが出るとは……」

「そうですね。とはいっても生徒は殆ど海から上がっていますし、実害はないでしょう。放つておくだけです」

こともなげにタシュアが言つ。

だが　まだルーフェイアの友だちが、あがつていなければずだ。そしてルーフェイアならともかく、他の下級生があの海竜相手に、無事切りぬけられるとは思えなかつた。

「タシュア、私も行つてくる」

言い置いて、私もルーフェイアのあとを追つようとして市場へと走つた。

I'm a d

「悪いしな、ヘンなことになつちまつて」

「いや、それ言つながらない。あの台風娘にまきこじまつて、悪かったよ」

俺とシーモアは、2人でぎつと昼食の後片付けを終わって、一休みしてゐるところだつた。

もつと多人数でやれば早いってヤツもいるけど、はつきりいってこういう場合、他の連中は邪魔なだけだ。特にミルとルーフェイアは、そだつたりする。

つかミルが邪魔なのは誰が見ても分かつけど、意外すぎるのはルーフェイアだ。

まったく出来ねえわけじやねえけど、ともかく手際が悪い。俺やシーモアなんかとはスピードが違います、結局邪魔になつちまう。しかもそのあと泣いて落ちこむもんだから、手伝わせねえのがいちばん楽だつた。

そのうち合間見て、教えてやつたほうがいいんかもしれない。

「おーい、イマド、まだ終わらねえのか？」

悪友どもがわざわざ呼びに来た。

「つたく、てめえら一休みくらいたせうつての」

「終わつたんならいいじやないか、ルーチャン探しに行かないか」

「ヴィオレイ、オマエが探しに行つたつて、ルーフェイア喜ばないつて」

アーマルがすかさず突つ込む。

それにもしても最近、ヴィオレイ頭ん中、ヤバい氣がする。暑さで

腐つてんじやねえかとか、つい思つくりこだ。

「イマド、あんた行つていいよ。あとせ、あたしらのだけだからさ
「やうか？ んじややうさせてもらひわ
けじ俺らが歩き出そうとした時。

「や～ん、たいへん～！ モンスターでたよ～！～」

「なんだつて！」

ぱたぱたと騒ぎながら走つてきたミルの言葉にて、俺もシーモアも
慌てる。

「どこだ、なにが出たんだ！」

「ええとね、あっち～！」

ミルが指差した。

なんだよ、あれ。

たしか資料で見たことあつけど、このあたりにはあんまいない海
竜で、しかも獰猛な種類だ。

それいでかい。

つて、そういえばミルのヤツ、たしかルーフェイアと一緒に
んじや……？

「ちよつと待ちなよ。ミル、ナティエスとルーフェイアはどうした
んだい！」

同じことを考えたんだろう、シーモアがミルに詰め寄つた。

「えつとね、ルーフェイアはシルファ先輩といつしょだつたよ。け
どナティエス、こいつち来てないの？」

「なんだつて！」

先輩と一緒にいるルーフェイアはともかく、ナティエスが一人と
なると……。

「あれえ、途中までいっしょだったんだよ。おっかしいなあ？？」

「ミル、このバカッ！ あんた！！！」

「やめろ、シーモア。こいつに言つだけ無駄だ。それより俺のツーリキットよこせ！」

「あ、ああ……ほらっ！」

シーモアの投げたキットが、綺麗に弧を描いて俺の手の中に収まる。

「まつて、あたしも行くう！」

およそ緊張感とは無縁のよつた嬌声で、ミルも名乗りをあげた。

「あたしもつて、お前が来たって……！」

迷惑、そういうかけて俺は言葉を途中で飲みこむ。

ミルがマジだ。

いつのまにか、持ちこんでいたらしい銃を取り出している。

「よし、援護頼むぜ」

性格はともかく、こいつ腕だけは折り紙付きだ。

「もつちろん！」

そのまま俺ら、走り出す。

「最後にナティエス見たの、どこなんだ？」

「あっち～」

5歳児みたいな調子でミルが答える。指差したのは石場のほうだ。

あれか！

確かに突端から少し沖の岩の上、人影が見える。それもなんですか

2つ。

片方は間違いなく、ナティエスだろ？
けども片方はどうみても……。

「ルーフェイア？！」

泳げないはずのあいつが、どうしてあんな場所にいるんだか？
でも不思議に思っているヒマがない。もう海竜がルーフェイアたちの近くまで迫っている。

もつともあいつも黙っちゃいなかつた。

突然天から雷撃が海竜に降り注ぐ。あいつ得意の上級魔法だ。
そこへ更に銃声がこだました。
この距離で全弾命中かよ。

やつたのはミルだ。曲がりなりに、Aクラスにいるだけはある。
この連続攻撃で、さすがの海竜も動きが止まつた。ルーフェイアたちを襲うのやめて、咆哮をあげる。

けどなんか、海竜の様子がおかしい。

倒れるとかじやなくて、めちゃくちゃに暴れてるような……？

「　　おい、ミル！　お前なんの弾撃つたんだよ！」

「え、あれ？　あ、暗闇の魔法込めた弾だつた！」

前言撤回！

あのサイズのモンスターが闇雲に暴れまわつたら、下手に狙われるより危ねえし。

「ミル、てめえなに考えてるんだよっ！
「だつて、撃つたらそうだつたんだもん
と、ごつん、と景氣のいい音がした。

「あ～、もう、いったいなあ！ せつかく撃ったのにひどい……！
「弾確認しないで撃つ方が、どうかしてるんじゃないのかい？」
いつのまにか傍へ来ていたシーモアが、ミルの頭を殴りつけたら
しい。

「いいもん、もうやんないから！」

「一度とやるんぢやないよ！」

非常時だつてのに、まるで漫才だ。けど幸い、海竜は暴れるのこ
必死で、ルーフェイアたちを襲うの忘れてやがる。
今のうちに足止めしておけば……。

「アーマル、お前いつもの武器、持つてきてつか?
後ろへ来ていたダチの一人に、声をかける。
「サブのヤツなら」

「じゃあ悪い、ちょっと手伝ってくれ。氷矢あるか？」

俺が使う武器は、どれも射程が短くて、こついう状況だと行動が
限られちまつ。けどアーマルが使っているクロスボウ系は、かなり
のロングレンジだ。

「さすがに氷矢は、持ってきてないな

「んじや空っぽのヤツ

「ほいよ

ダチがひとまとめ、俺に矢を渡す。鎌が空の魔力石で出来たやつ

だ。

それを手にとつて、魔力を込める。何でか知らねえけど、俺は昔
つから、魔方陣とかナシでこれが出来た。

海竜の方は相変わらず、すげえ勢いで暴れてる。

つたぐ、ミルのヤツ、どうしようもねえな。

毎度のことながら、あいつが絡むとなんだって、こつも事態がや
やこしくなるんだが。

「おし、これ頼むわ

「オッケー」

今までいつしょにやつてきたダチだ。何も言わなくとも、何をど
うするかなんて通じる。

立て続けに矢が放たれた。

「よつしや、全部いつたぜ」

「さんきゅ

礼言つて、俺は集中する。

行け。

手応えがあつた。

石に込めておいた魔法が、発動する。

込めておいた魔法は氷系だ。だから海竜の身体を中心にして、氷が浮
かび始める。

もつとも俺の魔力じや、じつやつたつて全面凍結つてワケにはい
かない。

けど、あいつなら。

そういう確信が、俺の中にあった。

Ruffeir

どうしてこいつがここに？

あたしがいちばん最初に思ったのは、それだつた。この海竜、外洋ならたまに見かけるけど、このあたりにはいなかつたはずだ。幸いなのは、この種類としては、まだそれほど大きいほうじゃじやないことだ。けど、とても獰猛だから油断できない。

「ナティエスつ、ミルつ！」

2人の名前を呼びながら、あたしは岩場の方へと駆けた。そして突端まで行つて、ようやくナティエスの姿を見つける。でも、思わず足が止まつた。

彼女がいるの、もう少し沖の岩の上だ。今あたしじや、泳いで渡るにはかなり厳しい距離だ。

しかもどこかへ打ちつけでもしたのか、足からかなり出血している。このまま放つておいたら、間違いなく餌食だ。

「ナティエスつ！！」

「ルーフェイア？！」

大声で呼ぶと、ナティエスが振り向いた。

互いの瞳が合つ。

鳶色の、諦めきつた瞳。

そこへ血のにおいを嗅ぎつけたのか、海竜が鋭い歯の並んだ口を開けて迫る。

「だめっ！！」

瞬間、周囲がぼやけた。

海も空も判然としなくなつて、真つ白な光が走つて 。

「 る、ルーフェイア？！」

気が付くと、目の前にナティエスがいた。

「 どうやって、ここまで？ 魔法？？」

その問いを聞きながら、あたしの身体はまだ勝手に動いていた。海竜のほうへ手が突き出されて、次の瞬間呪文もなしに、凄まじい雷撃が海竜を襲う。

まだ。

反射なんかとは違う、「何か」が自分を動かす感覺。確かにそこにある、でもあたしじゃ使えない力を、その「何か」は平然と引き出して振るうのだ。

気味が悪かった。

シユマーのグレイスには、いろいろ嫌な噂が伝えられている。人が所有出来ないはずの精靈を平然と従え、上級呪文を詠唱なしで発動させ、失われたはずの魔法を操る……。そして、その通りのことをしている自分がいる。

怖かつた。

このままいつたらどうなるんだろう、そう思うと背筋が寒くなる。もつとも今は、それを悩むのは後だ。この海竜をどうにかして、ナティエスを岸へ返さなくちゃならない。

「ナティエス、足、大丈夫？」

もういちど魔法で海竜をけん制しながら、必死に気持ちを切り替えて、ナティエスに話しかけた。

それにしてもミル、いないとこ見ると、ちゃっかり逃げ切ったんだろうか？

「慌てて岩に引っ掛けたみたいで……こんなに切っちゃうなんて」ちらつと見ると、たしかにとても泳げそうにない傷だ。

「自分で魔法、かけられる？」

「やつてみる」

治療はナティエス本人に頼んで、あたしは次の呪を唱える。

「遙かなる天より裁きの光、我が手に集いていかずちとなれ　ケラウノス・レイジッ！」

詠唱に呼応して、天からいかずちが降り注いだ。海竜の身体に、放電がまとわりつく。

さつきも雷撃が効いただけあって、海竜がひるんだ。でも、これだけじゃ……。

ナティエスは今泳げない。それを安全に岸へ返そうと思つたら、海竜を倒すしかなかつた。

かといつてここで全力を出せば、間違いなくナティエスを巻き込んでしまう。

どうしよう。

足止めが出来ればまだいいけど、それもあたし一人ではムリだ。せめて、誰かの手助けがあれば……。

そう思いながらも何か手がないかと、魔法にひるむ海竜を見る。

と、立てて続けに銃声が響いた。

「IJの距離で、全弾命中つて……」

距離からすればけして大きくない頭部に、さりと弾が当たつている。ただ遠いのと相手が大きいのとで、思ひほど効果はない。

「あ、ミルだよ、きつと」

「…………うそ…………」

人は見かけによらないって言つけど、本當だ。

でも、なんだか海竜の様子がおかしい。なんて言つんだろつ、苦しんでると言つよつは、闇雲に暴れてるよつな…………？

少し考えて思い当たつて、ちょっと背筋を冷たいものが伝つ。でもたぶん間違いない。

「ミル……暗闇魔法の弾、使つてゐる…………」

視力を奪われて暴れてる海竜は、見境がない分ある意味、狙つて襲われるより危なかつた。

ミルのばか、そう思いながら、ナティエスを押し倒して覆いかぶさる。

あたしの背中のすぐ上を、海竜の頭が通り過ぎた。

これじゃ倒そうにも、近寄ることさえ出来ない。かといって一気に勝負に出たら、やつぱりナティエスを巻き込んでしまう。

彼女と一緒に「う」のが、かなりの足枷だった。
あたしひとりなら発動範囲なんて気にしないで魔法が使えるけど、
彼女は巻き込まれたらただじや済まない。

せめて足止めに魔法を使いたいけど、丁度いいものがない。その
手の睡眠魔法やなんかは、効果の信頼性がいまひとつだ。
いつあの慣れぶりに巻き込まれるか分からぬのに、効くまでか
けなおしてはいるわけにはいかない。
かといって、一人じゃ足止めもできないし……。

と。

「 矢？」

向こうから飛んできた十数本の矢が、次々と海竜の身体に突き刺
さる。そしてすぐ海竜のウロコと周囲に、小さな氷が出来始めた。
「 う！」
想像はあたしと違つて、魔法を発動させるよりも付与させる方
が得意だ。今はたぶん矢に、冷氣系の魔法を付与させたんだろう。
その間にもある程度持続して効果を發揮する冷氣魔法は、徐々に
凍る範囲を広げつあった。

これなら、足止めができる。

「 幾万の過去から連なる深遠より、嘆きの涙汲み上げて凍れる時と
なせ フロスティ・エンブランスつ！」

立て続けに、氷系の最上位を放つ。思惑通り、海竜の周囲が凍結
した。

驚いた海竜が咆哮を上げたけど、もう身動きが取れない。

もつとも、ただ単に魔法を撃ち込んでもこつはいかない。イマドのおかげで水温が下がっていたからこそできた、ムチャとしかいえないやり方だ。

「 フロステイ・エンブランス！」

「こんどは後ろへ振り向いて、冷氣魔法を魔法を海中に叩き込む。こつちはまだ水温が高かったけど、それでも何度も繰り返すと、どうにか渡れそうなくらいの橋が出来た。

「ルーフェイア、す」「」ね

「だつていま、海竜……動けないし」

襲われながらじやさすがに、こんなことしてる余裕はない。

「えーっと多分、あたし言ったのと意味違うかも。でもたしかに、海竜動いてたら、こんなことしてられないよね」

「……え？」

微妙に話がかみ合わない。

「ともかく、今のうちに行かなきやね。よいしょっと……」

足をかばいながらナティエスが立ち上がり、顔をしかめた。かなり痛むみたいだ。

「だいじょうぶ？」

「痛いけど、逃げなきやだし」

見たところ、血だけは止まってる。でもこれ以上は魔法でムリに治すより、ちゃんと治療したほうがいいだろ。

「えっと、ちょっと待つて」

せめてと思って、ナティエスに浮遊魔法をかけてみる。

彼女の顔が明るくなつた。

「あ、これなら楽かも。さつきより平氣」

その声にほつする。

「2人とも、大丈夫か？」

振り向くと、シルファ先輩の姿があつた。あたしたちがもたもたしている間に、氷の橋を渡つてきたみたいだ。

「はい、大丈夫です」

「そうか。

2人とも、下がるんだ。あとは、私たちがやる」

「わかりました」

視線は海竜に向けたままの先輩に、そう答える。なにしろあたしたちは丸腰だ。ここは、お願ひするのがいちばんいい。

まずナティエスを先に行かせる。続いてあたしも行きかけた時、咆哮が響いた。

振り返つてみると、氷にヒビが入り始めてる。さすがに長時間は、持たなかつたみたいだ。

そのとき、不思議な光が視界に入った。不審に思つて光源を探す。

シルファ先輩？

先輩の身体が、燐光を発しているように見える。

それも物理的な光じゃない。強力な魔法を使うときに起つる、魔

力の発光現象だ。

同時にあたしは、もうひとつ独特的の気配を感じ取っていた。あたしにひとつはあまりにも馴染みすぎた気配 精霊。その気配が強まっていく。

けど召喚される様子はない。

代わりに、シルファ先輩の髪から色が薄れだした。漆黒のはずの髪が徐々に色を失い、やがて輝く白になる。

その時にはすでに身体のほうも、残光を描くほどになっていた。

これ、もしかして……？

精霊を憑依させて力を借り、戦闘能力を上げる方法はよく知られている。

ただこれはけつこう危険もあって、処理された精霊の、一部の力しか引き出せない。力欲しさに完全憑依させたら、乗っ取られて狂うのがオチだ。

でも「ぐまれに、それが出来る人がいる。

もちろんそれほど長時間は持たないし、使える精霊も限られる。なによりとも危険だ。ただその間は、通常の憑依を遙かに上回る力を、得ることが可能だった。

けれどそれをシルファ先輩が使うなんて、想像もしなかった。

「早くさがるんだ」

「あ、はい」

煌く白光に彩られた先輩が、あたしに声をかけた。確かにこの状態で武器を振るうには、あたしは邪魔だらう。

大きくなる氷のヒビを見ながら、急いで下がる。

と、今度は風に乗つてタシュア先輩の呪文詠唱が聞こえた。
「……の嘆きと怒りの咆吼をもちて……」

聞いたことのない韻。

いや、ちがう。聞き覚えがある。

まさか、禁呪？

ちょっと信じられなかつた。

禁呪は要するに精霊が使うもので、人の器で扱えるようなものじやない。

呪文そのものはいちおう誰でも唱えられるけど、発動させると代償として、生命力までもぎ取られて衰弱する。魔力が弱い人が使うと、死ぬことだってあるくらいだ。

それを、こんな風に簡単に扱うなんて。

でも、シルファ先輩がもう海竜に突つ込みかけている。このタイミングで魔法をかけたら、巻き込まれるのは確定だ。いくら精霊を完全憑依させているといつても、禁呪の直撃には耐えられない。

なのにタシュア先輩、まったく気にする様子がなかつた。

そして魔法が発動する。

一瞬にして暗くなつた空から十数条のもいかずちが降り注ぎ、あたりを薙ぎ払い、帶電した風が逆巻く。

空気が焼け焦げて、あの独特の匂いがただよつた。

さすがにこれは効いたらしく、海竜が咆哮をあげて動きを止め、その長い首を落とす。

逃さず、シルファ先輩のサイズ（大鎌）が一閃した。

抜群のコンビネーション。

ほんの僅かな発動範囲の差とタイムラグとで、シルファ先輩は無傷だ。

どさりと音を立てて、海竜の首が落ちる。シルファ先輩がほうつと息を吐き、燐光が薄れ始めた。

でもその時。

「先輩、うしろつ……！」

切り落とされて背後へと落ちた海竜の首が、突然牙をむいた。まさかの事態に、一瞬シルファ先輩の動きが止まる。

いけない！

戦いの最中には、この一瞬が命取りになるのだ。

とつさにあたしは呪文を唱え始めた。

選んだのは加速魔法。本当なら海竜のほうをじりこかするべきだけど、今はその必要がなかつた。

理由はわからないけれど、それはイマドがやつてくれるという確信がある。

「すべてを包む流れよ、幾重にも重なるその手にて……」

呪文が、完成する。

I m a d

「マジかよ」

本気でそれしか、言葉がなかつた。

タシュア先輩のあの魔法、どうみたって普通のやつじゃねえし。それにシルファア先輩、噂は聞いたことあつたけど、あれほどとほつか、水着姿でサイズ振りまわすつてのも、結構見ものだった。

とりあえず海竜が首を切り飛ばされて、片付いたらしい。俺は豪快に凍つた海見ながら、ルーフェイアの方へ歩き出した。

それにもあのでかい海竜が氷に押さえつけられた拳句、コゲて首のない胴体になつてるのは、けつこう情けない姿だ。首は首で、あっちの方に転がつてゐし。

え？

今、首が動いた……？

一瞬目の錯覚かと思つたけど、そうじやなかつた。

間違いなくヤツ、動いてやがる。信じらんねえ生命力だ。しかもシルファア先輩、さすがに気を抜いてる。

とつさに、魔力の付与に入った。狙いはあの海竜の首に叩き込まれた、ミルの弾丸だ。

集中して、波動捕らえて、ねじ伏せる。込められてた魔法を、強引に違うものに切り替える。

行けっ！！

この魔法なら、絶対にルーフェイアとぶつからねえはずだ。根拠はねえけど自信はある。

海竜の身体に残つてた幾つもの弾から、重力魔法が発動した。

Tasha side

（泳ぎ足りなかつたのですかねえ……）

万全を期したのかもしれないが、足止めされている海竜に、シルファがあの荒業を出してくるとは思わなかつた。

泳げない後輩の相手ばかりで、力が余つていたのだろうか？見かけからは想像しづらいが、シルファは意外なくらいの前衛派だ。いざとなれば即座に前へ出て、切り込んで刃を振るう。

いざれにせよ、おおむね片付いたようだ。

もつとも、気を抜くつもりはなかつた。なにしろ相手は海竜だ。その生命力は尋常ではない。完全に死ぬのを見届ける必要がある。

（シルファ、緊張を解くのが早すぎますよ）

首を切り飛ばしただけで戦闘体制を解くパートナーに、軽いため息をつく。あれほど普段から、言つていいのだが。

人間にせよ魔獣にせよ、死に際の一瞬は危険だ。何をしてくるかわからない。

案の定後ろの海竜が、首だけの状態でまだ、動いている。

さすがに危険だと判断して、タシュアは再び呪文を唱え始めた。禁呪の連續になるが、もう一度くらいなら差し支えないだろう。出来れば普通の魔法にしたいところだが、ちょうどいい手持ちがない。使うとシルファを巻き込んでしまう。

生命力を削られるのを承知で、タシュアは呪を発動させた。

S y i p h a

「先輩、うしろつー！」

ルーフェイアの叫びで、もういちど私の身体に緊張が走った。

絶命したとばかり思っていた海竜が、首だけとなつて尙牙をむく。

驚いて、一瞬対応が遅れた。

首が跳ね上がり、大きく口が開く。

間に合つか？

サイズを持ちなおし、踏みこむ。

まだ精靈、ヴァルキュリアの憑依状態は解けていないが、間合いか
近い分、先に動いた向こうが有利だ。

案の定向こうの方が速い。さすがに怪我を覚悟する。

が、突然海竜の動きが遅くなつた。同時に私の身体がスピードを
増す。どちらも魔法だ。

あの2人か？

これだけ離れていてこの連携を見せるとは、なかなかやる、そう
思う。

さらに私の良く知る気配が辺りに満ちた。風に乗つてか、呪文の
詠唱が聞こえる。

「闇の底に眠りし混沌の力、一條に集いて
タシュアの禁呪だ。

田を射る光の矢が飛来して、海竜の首に突き刺さつた。

たちまち松明のように、首が白い炎に包まれる。生命力を削り取
る禁呪を、タシュアに連續で使わせてしまつた自分に、腹が立つた。

その思いを呑きつけるよつとして、サイズを振るつ。海竜の首を、
今度は縦に両断した。

燃えながら、首が左右に分かれて落ちる。しばらくかがつたが、
さすがに今度は動かなかつた。

よつやく緊張を解く。

「先輩、大丈夫ですか？」

いちばん近くにいたルーフェイアが、真つ先に駆けてきた。

「すみません、あの、あたし、とつさに……魔法、かけちゃって」

第一声は、なんと謝罪だ。

「あの状態じゃ……もしかしたら、危険だったかもしれないのに……」

…

下手な言葉をかけよつものなら泣き出しそつな表情で、少女が私
を見上げている。

先ほどから連續で凄まじい魔法を放ち、海竜を丸ごと凍結させ、
さらに絶妙の連携プレーまで見せたのとはまるで別人のよつだ。

「なんでもなかつたんだ。気にしなくていい」

「でも……」

「いいんだ」

私がきつぱり言つと、よつやくルーフェイアも表情を変えた。ど
うにか納得したらし。

しばらくそのままその場にいたが、そのうち海竜の首　　といつ
より残骸　　に歩み寄り、つま先でつつき始めた。

「もう、動かないですね」

「あまり、動いて欲しくはないな」

しかし……美少女がこういうものを、平氣でつづいているといつのは、どうにも形容しがたいものがある。

戦場奮ちで見なれないと言えば、それまでなのだらうが……。

「とりあえず、戻らないか?」

「あ、はい」

見かねて言った私の言葉に、ルーフェイアは素直に従つた。少し溶け始めた橋を、2人で急いで歩く。

「冷たい……」

ルーフェイアが小さくつぶやいた。

当然だらう。彼女は素足だ。それで氷の上を歩けば、冷たいに決まつている。

「ルーフェイア?」

「あ、はい? きや!」

可哀想に思つて抱き上げると、少女が悲鳴を上げた。

「あ、すまない。いま降ろす」

「いいです、このままで」

まるで母親に抱かれた子供のように、ルーフェイアが身体を預けてくる。

不思議な気分だつた。少女が自分の妹のように錯覚する。

無条件の、疑いをまったく挟まない信頼。それをこつも簡単に見

せるとは。

「Jの子はよほど、周囲に愛されて育つたのだろうな。

そうでなければ人は、疑うことばかり覚えるものだ。またそうであつたからこそ、こんな優しい少女が戦場に出されて尚、真っ直ぐに成長したのだろう。

少し羨ましい気がした。Jの学院で、ルーフェイア以上に愛されて育つた者は、いないだろうと思つ。

意外に距離のある海面を渡りきると、タシュアともうひとり下級

生　　イマド、といつただろうか？　　が待つていた。

「タシュア、身体は大丈夫なのか？」

禁呪を連續で使つたタシュアが心配で、真っ先に尋ねる。

「私の身体を心配するのでしたら、その分戦闘に気を向けなさい。いつも言つているはずですよ。完全に死を確認するまで気を抜くなと」

厳しい。

だが私を心配していればこそその言葉だ。

「次は気をつける」

「言葉ではなく、態度で示して欲しいものですね。

ところでいつから、シルファまで保護者になつたのですか？」

例によつてタシュアが、嫌味とも取れる言葉を付け加える。もつとも今度は、口調にはからかいが含まれていたのだが、これはルーフェイアには分からなかつたようだ。

「あ！ す……すみません！」

慌てて私の腕の中から降りようとして、落ちそうになる。

「急に暴れるな。落ちるぞ！」

「すみません……」

素直というのだろうか。よく謝る少女だ。

とりあえず足を怪我しなそうな場所を選んで、降ろしてやつた。

「先輩、ありがとうございました」

「いや、いいんだ」

私の傍に立つたルーフェイアは、頭一つ以上身長が違つた。

年令のわりに小柄で、華奢な体つき。

これでよく、あの海竜と渡り合つたな。

友人のためとはいへ、あんなものの前に飛び出すなど、そういうできるものではない。

そして気が付いた。

「そういえばルーフェイア……いつから泳げるようになつた？」

さつき教えていた時は、とてもあの距離を泳ぎ切れるほど、上手くはなかつた。

なにより人というのは、そつ簡単になにかが出来るようになるものではない。そうだといふのなら訓練は無用だ。

だがこの質問に、少女の顔が曇つた。泣き出しそうな瞳になる。

「え、あ、その……すまない、何か悪いことを言つたか？」
何かに怯えたような表情。

「どうしたんだ？」

重ねて訊いてやつと、ルーフュイアが言葉を発した。

「怖い……」

「え？」

いまひとつ要領を得ない、切れ切れの言葉が続く。
だがそれをひとつひとつ訊きだして、つなぎ合わせて……私は言葉を失つた。

自分の意思とは無関係に、振るわれる力。

そういうものが、自分の中にあるのだと、この子は言つのだ。

信じ難いが、嘘をついているようにも見えない。それにあの戦闘力や何かを考えると、かえつて納得がいくくらいだ。
こいつ話を、普段なら一笑に付すタシュアが否定しない辺りからも、事実だろ?と思つた。以前からこの子については、タシュアは何か知つている節がある。

だが、どうすればいいのだろう? 何か言つたほうがいいとは思うが、言葉が出てこない。

仕方なく頭を撫でてやつたが、この子は泣き止まなかつた。

Episode・32 意思

Ruffer

「そういえばルーフェイア……いつから泳げるようになった？」
先輩の何気ない言葉が、ぐさりと胸に突き刺さった。

さつきのことを思い出す。

自分が自分でなくなる感覚。

人ならできないはずのことを、やってしまう恐怖。

涙がこみあげてくる。記かれたくない。思い出したくない。

「え、あ、その……すまない、何か悪いことを言ったか？」
声が詰まつて、先輩の質問に答えられない。

いつものことだけれど、恐ろしくて仕方がなかつた。

自分が、自分でなくなるなんて。

「どうしたんだ？」

答えようとしたけど、やつぱり涙ばつかりで、声にならなかつた。
ほんとうにこのままで、大丈夫なんだろうか？

「あの」力がいつか、あたしを乗つ取つてしまつような気がして、
とても怖かつた。

次々と涙があふれてくる。

こんな力いらない。

あたし普通が良かつたのに……。

いちばん最初は、3つの時だった。

あの頃あたしはまだ戦場にはいなくて、どこの町に住んでいた。

父さんはいなかつたから、たぶんどこかへ傭兵として出てたんだ
る。母さんとあたし、それに住みこみのお手伝いさん、3人だ
つたはずだ。

あの日、母さんはどこかへ出かけて、家にはあたしとお手伝いさ
んの2人だった。

ベッドの中でうとうとと昼寝をしていて、目を覚ました。
悲鳴が聞こえたのだ。

でも寝ぼけていたせいなんだろう、たいして怖いとも思わず階段を降りて、居間をのぞいた。

そしてあたしが見たのは、血溜まりと、背に短剣を突き立てたまま倒れたお手伝いさんと、知らない男たち。

何が起きたのか分からず立ちつくすあたしを、振り向いた男たちの視線が捕らえる。

何かの罵り声と、振り上げられる短剣。

当然どうしたらいいかわからなくなつて、けれど身体が動いた。
あたしの中の「何か」は、あまりにも冷静に身体を動かし……さ

つきみみたいにあたしの身体は、片手を上げた。

手から吹き上がる、「黒い炎」。

それはうねりながら虚空を走つて、男は炎が触れた場所から、塵になつて消えて行つた。

もう一人の男がそれを見て、腰を抜かしながらあたしに言つた。
「化け物」と。

ちょうど母さんはそこへ帰つてきて、即座に残る男を叩き伏せて、それからあたしのやつたことに気づいた。

呆然とした表情で、あたしと室内とを見ていたのを、覚えてる。

ただ記憶はそこまでで、あとははっきりしない。ひたすら母さんの腕の中で泣いて、慰めてもらっていた気がする。

でもあの言葉、「化け物」というそれを、あたしは今も否定できなかつた。あの時あたしがやつたことは、明らかに人の範疇を外れていたのだから。

いざれにしてもこの一件であたしが「グレイス」だと発覚し、その後は戦場で暮らすことになった。

理由は簡単。

とつさの行動で人を殺しかねないこの幼児は、そういう場所に置いておくに限る。

戦場なら普通の社会と違つて、何人殺したつて問題はないのだから。むしろそうして磨き上げた方が、シユマーの次期総領としてはふさわしい。

そうやって、どれほどこの手を血に染めたのだろう……。

終わることのない、悪夢。

「……こんな力、いらない……」

虚しい咳きが、あたしの口から漏れた。

Sympa

「……こんな力、いるない……」

かける言葉が見つからなかつた。

まさかこんな少女が、これほど重いものを背負つているとは……。

場が沈黙する。

だが、それをあつさりと打ち破つた者がいた。

「だから何だと云つのです？」

タシュアのまるで、「くらだなうい」とでも言いたげな口調。

口調だけではなく、彼にとつては事実そうだろつと思つ。何しろタシュアは、他人に関心がない。

他人に干渉されるのをとても嫌う代わりに、一切他人にも干渉しない。それがタシュアの生き方だつた。

幼かつたり障害があつたりといふ、やむを得ない事情があればまた別だが、そうでなければ自分にも他人にも同じように厳しいのだ。学園内でも一、二を争うのではないか、それほどに過酷な中を自力で生き抜いてきたことが、よけいにそうさせているのかもしれないがつた。

「欲しくないといつても、現に持つていいのじょう。逃げる」とばかり考へないで、立ち向かつてはどつです」

辛辣な言葉。

だが、私にしか分からぬかも知れないが、その声は決して冷たくはない。やつぱりタシュアはこの子について、何か知つているのだろう。

「泣いているだけで何かが変わるのでしたら、一生そうしていなさい。自分が何を持っているかにも気づかない愚か者には、それがお似合いです」

「この厳しい言葉の意図が、ルーフェイアに分かるだらうか？ 分かつて欲しかった。
なぜならタシュアは……。」

「もう一度、よく考えてみるのですね」
最後にそれだけ言って、タシュアは背を向けた。いつものように音も立てず、気配もせせに立ち去る。

「ルーフェイア、タシュアの言つとおりだと思う。辛いだらうが……よく考えてみるんだ」

私もルーフェイアの頭を撫でながら、言った。

まだ11歳でしかない少女に、しかも本人の意思とは関係なく重いものを背負わされているのに、こんなことをいうのが酷なのは、私にも分かる。

だが人は、誰でもいつかは独りで歩き出さなくてはならない。

だから、ルーフェイア。

「タシュアの受け売りだが……一步を踏み出さない限りは、何も進歩はない。何でも良いから、一つはじめてみるんだ」
そして私も、タシュアの後を追つた。

I m a d

浜辺に、ルーフェイアのヤツが立ちぬくじてゐる。

「だいじょぶか？」

「……うん」

だいじょぶなワケねえのに、そんな答えが返つてきた。
隣に俺が座ると、こいつも砂浜に腰を下ろす。

昼下がりの空に、波の音が響いた。

「その、なんかワケわかんねーの、ずーっとなんのか？」

俺の問いに、ルーフェイアのヤツが泣きながらうなずいた。

「んじや、きつついよな……」

タシュア先輩の言いたいことも、まあ分かる。自分のことなんだ
から、泣いてねえでなんとかしろ、ってんだろう。

けど俺の見るかぎり、ルーフェイアのその「なんか」は、自力で
どうなるよりも思えなかつた。

つか自力でどうにか出来るなら、ぜつたにこいつはやつてるわけ
で。それがただ泣いてんだから、散々試してダメだった、ってどこ
なんだろう。

それをどうにかしろ、ってのもなあ。

先輩たち知らねーからしやあねえけど、ずいぶんな言い草だ。

ただ、なんか状態変えたほうがいいってのは、俺も賛成だつた。
このまんまの状態続けてたら、そのうちこいつ、潰れるだろ。う
かといって、その「問題」は片付けようがないわけで……。

「どうして……あたし、なんだろ?」

当たり前つちや当たり前の疑問を、ルーフェイアのヤツが口にする。

「もつと、向いてる人……ほかに……」

どつか思いつめたふつの声に、俺は答えた。

「考へても、しゃーねえんじやねえか?」

「え?」

驚いたようすで、ルーフェイアのヤツが顔を上げる。俺の言葉が、かなり意外だつたらしい。

「んー、なんてのかな。今こりで考へても、ぜつたい理由とかわかんねえし。

だつたら考へるだけ、無駄だろ

「それは……そつ、だけど……」

口じやそう言いながらもこいつ、どつか納得できねえらし。

ただ俺的にはそろそろ、こいつの表情じやなくて、もつと楽しげにしてて欲しかった。

「俺がそーゆーの持つてるわけじやねえから、分かつてねえかもだけどさ。

けどおまえ、とりあえず今ふつひこやれてるし。学院に来たから、当分は前線出ねえで済むし。

なら、今はそれでいいんじやね?」

ルーフェイアのヤツの、呆気に取られた顔。
それからこいつが、ぽつりと言へ。

「イマド……適当すぎや……」

「ねつせ」

思わず言ひ返すと、いつも通りにいつが謝った。
「え、あ、じめん……えっと、そういう意味じゃ、や、なくて」
慌てる様子が、見てて面白い。

「上手く言えねえけどさ、けつせよく向でも、なるよひ立たせやらねえだろ。

だから何もしねえつてのはヤベえけど、やれるだけやつたら、あとはしゃーねーって

ルーフェイアのヤツが下を向いた。

唇から言葉がこぼれる。

「けど、もし、もつ少し……」

何かやれてたら、つてんだら。俺もこれは昔やうかしたから、少し苦くなる。

けど だから言える。

「しゃあねえつて。俺らカミサマとか、やつのじやねえから、何でもできねえよ」

つらい諦め。チビの頃信じてた、何でも出来るつて気持ちを捨てるのは、楽しいもんじゃない。

けど、それが現実だ。

「やれるだけやつても、気がつかねえとか足りねえこと、あるや」

「……」

たぶん真面目なこいつは、「どうじょつけなかつた」とことを、受け入れらんなかつたんだら。

誰も悪くないってのは、ある意味で逆につらい。憎む相手がいたほうが、ずっと楽だ。だからこいつは自分を責めて、自分を納得させてたんじやねえだろうか。

つか、俺もそうだった。

けどどんなに責めても、過きたことは変わらない。だからある程度で見切りつけて、進まなきやダメなんだと俺は思つ。

「てかわ、『んなこと』言つたら、怒るかもしんねえけど。
けどおまえの兄貴、おまえのそつこつ、喜ばねえんじやね？」

「……」

何かに気がついた、ルーフェイアのやつがそんな顔をする。

「おまえの兄貴よく知らねえから、あんま言えねえけど。でも、
そんな気がすんだよな」

「そう、かも……」

ふつとこいつが、何かを吐き出すみたいに、ため息をついた。
受け入れたくねえけど、受け入れるしかない。そんなルーフェイ

アの表情。

それから、言つ。

「……」めん

「いいつて

何が、とは聞かなかつた。だいいちこいつ自身も、突つ込まれたら答えらんねえだろう。

今までのいろんな重いものに、ある程度ケリつけてくれりや、俺
としては十分だ。

「とりあえず、もうつとこつとこつ見ろよ。あんま後ろ向つてつと、
よけい落ち込むぜ？」

「……そうだね」

こいつが淡く微笑む。今までと少し違う、穏やかな笑顔だった。

やっぱ素直だよな。

人になんか言われたからつて、普通はこんな簡単に、変わらうな

んてできない。けどそれがやれるのが、ルーフェイアの強みだね。"

「まあおまえ以上の事情あるやつとか、他にいねえだらうから、落ちこぼじまつ分かるけどな。

けど金に困ったことねーし、親いるし、その辺りといこんじやね？俺から見ても、けつひつ羨ましいしゃ

「あ……！」

声をあげたルーフェイアのヤツに、今度は思わず突っ込んだ。

「おまえもしかして、気づいてなかつたのか？」

「「めん……」

可笑しくなつた。」うこう天然ボケは、いかにもこいつらしこつい笑い出した俺に、ルーフェイアのヤツが怒つた調子で囁く。

「そんな、笑わなくとも……あたしが、悪いけど、でも……」「悪い悪い！」

謝る側と謝られる側が反対の気がすつけど、まあそれはそれだ。

「ま、みんないろいろあるつて。おまえがトップクラスだとは、思つけどよ」

「そうだね、そうだよね……」

またルーフェイアがうつむく。でも、泣いつとじてじやなくて、考へてた。

「泣いてても、変わらない、から……」

「いつがいつも必死なのは、俺にもわかつた。前も見えないほどの荷物で、どっちへ行つたらいいかわからない、よつするにそつ」とだ。

そして今、確かにこいつは歩き出そうとしていた。
優しいことが取り柄なのに、まったく筋違いな荷物を背負つたま
まで。

ルーフェイアが顔を上げる。

「あたし……自分のことしか、見えてなかつた」
自嘲したような表情。

やつぱお前、すゞいぜ。

人前で自分のことを、こんな風に言えるやつは少ない。
いい意味でプライドを持たないルーフェイアを、羨ましく思った。

「あたしひとりが辛いんだと思つてた。ひどい、つて。
けど、あたしだけじゃなくて……みんなそれぞれ、辛くて……」
深い碧の、真っ直ぐな瞳。

まるでガラスのように澄んで……。

「 そゆことだな」

その瞳におされながら、そう俺は答えた。

この世界のどこにも、辛くないやつなんていない。
先輩たちは言つに及ばず、シーモアなんざストリートキッズして
たし、ナティエスもそうだ。ミルもあれで、けつこつこつこつあつ
たらしい。

そして俺も、ルーフェイアとは比べものこやならねえけど、それ
なりにあつた。

この年でなんで、つて氣はあるけど、それを言つてもどうにもな
らない。その他にだつて辛いことなんか、数えるのも馬鹿らしく
らい次々と起ころる。

ナビ やるしかない。

「頑張つてつらにつかはっこことあるなんて、そんな下らないこと言わねえ。でもなにもしないで泣いてたら、そこで終わりだかんな。だからせ、泣いてもいいから、やつてみろよ」

「 そりだね、そりする」

優しいこいつのこことだ、またなんかあれば、わいつて泣くだらう。辛さに嘆く時もあるだらう。

けど今度は間違こなく、自分で立ち上がるはずだ。

真に強いやつは真に優しい。その言葉を思い出した。
これは、その強さじやないんだらうか?
少なくとも俺には、わつ思えた。

Ruffer

「先輩、その……ちつきは、すみませんでした」

少し落ちついたところで、あたしはタシュア先輩に謝りに行つた。ほんとうは行かなくてもいいのかもしれないけれど、それだとあたしの気が済まない。

言われて初めて気がついた。あたしには、ちゃんと両親がいる。イマドも、先輩たちも、シーモアもナティエスもミルも……両方、あるいは片親がいないのに。

自分がこんなに多くのものを持っていたことに、どうして気づかなかつたんだろ？

結局あたしは辛かつたことだけを抱えて、そこで泣いていただけだつたのだ。

逃れたいといいながら、自分でその手に辛さを抱きしめていた。これで逃れられるわけがない。

この手を、放さなくちゃ。

そうして身軽になつて、歩き出さなくちゃいけない。

怖いけど。不安だけど。でもやらなきや……。

いろいろなことが頭をよぎる中、真っ直ぐにタシュア先輩を見る。こんなふうに先輩を見ることができたのは、初めてかもしない。

「何を謝るのですか？ 何か悪いことでもしたといつ、意識があるのですか？」

それが先輩の返答だった。

とたんに何を言つたらいいのかわからなくなる。

だめ、考えなくちゃ。

自分が何を言いたいのか、今どうしたいのか、必死に考える。

「ええと、あの、あたし先輩に……」

「ですから、何をしたというのです?」

タシュア先輩つて、どうしてこういう意地悪なんだろう? おかげでまたどう言つたらいいのか、分からなくなってしまった。
なかなか適当な言葉が思い浮かばない。

泣きそうになるけど、それはどうにかしらえて、また必死に考える。

「ルーフェイア、いい顔になつたな」

「え?」

突然のシルファ先輩の言葉に、驚いた。

「あたしが……?」

信じられない言葉。

困惑してイマドの方へ振り向く。

「俺もそう思う。お前今、いい顔してるぜ」
同じことを言われて、ますます困惑する。

「どう見てもまだ、ヒヨコですがね」

タシュア先輩……怒らない?

そして気が付いた。

もしかしてこれ、みんなあたしのこと、褒めてるんだろ? か?

うそ、みたい。

こんな風に正面切つて、あたしにこうこう言つてくれるなんて。

今までそんなことはなかつた。「グレイス」という名のせいいで、誰もわたしの傍へは来なかつたし、普通に扱つてくれる人もいなかつた。

それに何もかも、「出来てあたりまえ」にされてたから……。

「こんどは、涙をこらえきれなかつた。泣いちゃダメだと思つけど、どれほどぬぐつても、あふれてくる。

「じめんなさい……あたし、やつぱり……」

「ま、そういうのなら、泣いてもいいんじゃないかなえか?」

イマドが笑つた。

「わたしも、いつことなり悪いことは思わないが、シルファ先輩もやつぱり泣いてくれる。

「やれやれ……泣き虫は相変わらずですね。

あなた1人が、重いものを背負つているわけではありますよ。自分だけが悲劇の主人公などと、思いこまないことですね」

「はい」

あたしのことだ。きつとまた泣いてしまつだらうし、座つここんでしまう時だつてあるだらう。

でも、みんないるから。

だからきっと、立ちあがれる。

波が無限の回数、よせては返すよつこ……。

あとがき

7作目を最後まで田を通してください、ありがとうございます。

なお明日からは、第8作目「力の行方」の連載を開始します。

いつもどおり、“夜8時過ぎ”の更新になります。

感想・評価大歓迎です。一言でも、お気軽にどうぞ

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6152e/>

立ち上がる意思 ルーフェイア・シリーズ07

2011年2月7日09時11分発行